

### 道内初！東、東神楽町が両町内のスーパーと災害時の協定



8日東神楽町役場で協定を結びました。「東神楽町、東川町の災害時における応急生活物資の供給等に関する協定」といいます。災害時に、両町と両町内に店舗を置く小売業者3社は、両町からの要請に基づいて、相互に緊急物資、飲料水など38項目の物資を融通しあうことが出来るようになりました。2年前、道内では北海道と道内各自自治体間で災害時の緊急物資応援協定を結びました。今回の協定によって、両町内の民間スーパーマーケットの店舗とも連携して災害に備えることが可能になり、さらに迅速な対応が出来るようになりました。

東川、東神楽両町は、両町内でスーパーマーケットを運営する3社が、万一の災害時に相互に緊急物資を融通しあうことが出来る協定を結びました。万一の災害発生時に、自治体間、民間企業の垣根を超えて、相互に緊急物資を融通しあうことが出来る協定を結んだのは道内で初めてです。行政側は松岡市郎町長、川野恵子東神楽町長、両町内に店舗を出店している㈱ホクレン商事（札幌）の中田清志社長、㈱ふじ（旭川）の六車亮社長、㈱西條（名寄、西條久喜社長）の西條敬弘副社長の5者代表が出席し、9月

### 浜中町で47年間地域医療を支えた道下俊一医師が講演



9月1日、農村環境改善センターで釧路管内浜中町の元町立浜中診療所長、道下俊一医師の講演会がありました。10年前に退職するまで、47年間にわたって浜中町の地域医療を支え続けました。自身の記憶をつづつた「霧多布人になった医者」（北海道新聞社刊）を出版した同タイトルの半生を振り返りました。1950（昭和25）年、北大医学部を卒業。3年後、前年に起きた十勝沖地震津波の被害対策として、1年間の予定で釧路赤十字病院浜中分院（当時）に派遣されました。この地でのスターが地域医療一筋47年間の出発点になりました。「荒天の中、急診を頼まれて、どこを走っているのかまったく分からない中で漁船の杭にしがみついて3時間も海を流され、浜でたいてくれたたいまつのおかげでようやく往診に駆けつけた」「札幌に帰らないと決めた翌日、それまでは1年草を庭に植えて楽しんでいた妻が、エゾヤマザクラの苗3本を庭に植えた」など、地元の人たちから信頼される医師として認められるようになるまでのさまざまなエピソードを披露しました。

### 米初出荷、平年より10日早く期待の出来秋

9月7日、今年の米出荷がスタートしました。今年の米の生育は、例年にならない高温過湿の天候続きで生育が早まり、例年より10日早い生育。町内の一部倒伏稲からはすでに穂発芽も始まっているといい、町内は例年になく早い急ピッチの稲刈り。同月10日過ぎからピークを迎え刈り入れ本格化しました。東川町農協集出荷センターに第1号

出荷したのは、西4号北17番地、永谷哲也さん（73）。不良年だった昨年より16日早く、好天続きで豊作だった2年前よりも3日早い出荷です。「ほしのゆめ」12.6袋（1袋30キロ）全量が1等米出荷になりました。「今年が良い米だ」というとおり、出来栄は最高レベル。例年より1粒当たりのもみ重量も多く、水分量14・



5%、たんばく含有量6・5%、精粒歩合も80%以上に達しました。この日出荷の2番検査「ゆめぴりか」も全量1等米出荷となりました。（関連は10、11ページ）

### 相手の思いがけぬ行動を褒め「幼稚園教育大会



9月9日、東川町幼児センターで22年度上川管内国公立幼稚園教育研究大会が開かれました。

公立幼稚園がある上川管内の7つの国公立幼稚園の教員ら約40人が集まりました。園庭を会場に、草花を使ったままごと、色水づくり、砂場のダム・川づくり、そしてグラウンドではサッカー、築山での尻すべりなど、年齢別にいろいろな遊びをしている保育を公開しました。室内の発表では、同センターで日々取り組んでいる教育保育テーマ「気持ちの伝え合い、心をかよわせることが出来る子」の研究と実践を発表しました。「今の子供たちは、直接体験の不足

人との関わりの希薄化、過保護、過干渉などによって、相手の気持ちを感じることが苦手。自分の主張だけを通してうとする姿が見られる」として「遊びの経験を積むことで、人との関わり、相手の気持ちが分かるようになる。幼児同士のつながりを深めることで友だちの気持ちに気づき、共感し、心を通わせる喜びを感じることが出来る」などと2年計画の指導実践例や課題を発表しました。

### マンモスマナーの千歳真子さんが小学校で特別授業



9月2、3の両日、マラソンランナーでスポーツコミュニケーションターの千歳真子さん（34）が来町し、小学校5、6年生に「夢の教室」と題して特別授業をしました。「最初から陸上競技をしていたのではなく、小学校5年生の時に一番一生懸命やってきたのはバイオリン。7年間習い、将来はバイオリンリストになろうと思っていたけれど、中学校を卒業して高校で部活に入ったのはテニスだった。でも一生懸命にやった7年間のバイオリンはむだではなかった」などと小学生の時の自らの夢を披露。「皆さんの夢は何ですか？」と一人ひとりに問いかけ、夢に向かって一生懸命に努力することの大切さを話しました。日本サッカー協会の「JFAこころのプロジェクト」と題して来町しました。同プロジェクトは、2007年度から始まっていることです。現役、OBのスポーツ選手が「夢先生」として全国各地の小学校を回って夢に向かう体験や素晴らしなどを話しているということです。

### 今年も豊作、神饌田で例年より10日早く稲穂祭

8月27日、東2号北1、三田常男さん（63）の水田で北海道神宮神饌田（しんせんでん）の稲刈り、抜穂祭（ぬいぼさい）が行われました。夏期間の高温、好天に恵まれて稲の登熟がどんどん早まり、急ぎよ予定を早めて例年より10日も早い稲刈りになりました。吉田源彦宮司の祓詞（はらえことば）に続いて12人の早乙女、6人の介助役が黄金色に頭をたれた稲穂

をかき分けるように田に入りました。稲刈り唄（うた）に合わせ、一株ひとかぶ手刈りした稲は、その場ではさ掛けしました。収穫した新品種「ゆめぴりか」の神饌米10俵（1俵60キロ）は、新嘗祭（にいなめさい）で北海道神宮の神前に奉納することになっています。町内の水田では、昨年からの転して早い稲刈りシーズンを迎えました。

